

エッカーマンについて

——「ゲーテとの對話」をめぐつて——

田 川 基 三

ゲーテの同時代者たちによつて記録されたゲーテの想い出や言行録のたぐいはまことに数しれず Biedermann の編集した *Goethes Gespräche* 5 Bde. について見ても、そこに名をつらねている人々の数は數百を下らぬ有様であるが、試みにいま書物となつて出ているものの主なるものをあげるならば、Eckermann: *Gespräche mit Goethe* などはじめとして、Johannes Daniel Falk: *Goethe aus näherem persönlichem Umgange dargestellt*, 1832; *Goethes Unterhaltungen mit dem Kanzler von Müller*, Hrsg. v. Burkhard, 1870; Friedrich Wilhelm Riemer: *Mitteilungen über Goethe*, 1841; Friedrich Jakob Soret: *Zehn Jahre bei Goethe* などが考えられるであろう。これらの人々はゲーテとの關係の違ひや、その筆録の意圖の異なるにしたがつて、それぞれ獨自の特色ある記録をのこしている。たとえばフォン・ミュラー翰長の *„Unterhaltungen“* は簡潔な日記であり、リーマーの *„Mitteilungen“* は、ゲーテの「ヴァインケルマン」にならつて、それぞれの項目にわけて分類整理された記録である。しかし、エッカーマンの「ゲーテとの對話」ほど、まとまりのある感銘を讀者に與えるものではなく、それはドイツ本國のみならず全世界にわたつて、またゲーテ研究家のみならず廣く一般讀者層に

も、今日に至るまで親しまれている。ちようど影の形にそうように、ゲーテが論じられるところでは、きまつてこの書物が姿をあらわし、まるでゲーテの註釋か索引のように、隨時隨所で適切な言葉が取り出される。この意味でエッカーマンは、彼自身の詩作によつてではなく、ゲーテの代辯者として堂々とドイツ古典主義作家に伍していると言ふことが出来る。また一人の偉人への最も誠實な傾倒の模範として、「エッカーマン」という一つの概念をさえつくり上げている。

「對話」(以下このように略記する)の價值はゲーテの生涯の多彩な姿を、ことに晩年の圓熟しきつた詩人の生活、われわれの眼のまえに見事に繰りひろげてくれる點にある。しかし、この本のそのような不變の魅力、不動の價值のよつて來るところが、この書物の中心に立つゲーテの偉大さにあることはいまさら言うまでもない。「對話」を讀むと、われわれはさながらゲーテ家に親しく足を踏み入れ、そここの部屋のスミズミを見てまわり、また彼の作品、彼の構想、彼の思想の内側までも覗きこむ感じがする。エッカーマンの描いているゲーテは、もはや不羈奔放な若い日のゲーテではなく、七十歳から八十歳にかけての圓熟しきつて象徴の域にたつたゲーテの姿である。「對話」が世に出た頃(一八三六年)は、ちようどドイツの大部分の者が、あわただしい價值轉換に心をうばわれて、もはや「ファウスト」の詩人に對して忠誠をつくすことを忘れはじめた時であつた。しかも、この老年のゲーテの姿がなお後世に人氣を呼び、今日までもわれわれの間に生き續けている。

エッカーマンが、はじめて胸をときめかせながら、フラウエンプラーンのゲーテの家に足を踏み入れ、ゲーテの親切な應待ぶりにすつかり感激して、「生涯の最も幸福な日」と思つた瞬間(一八二三年六月十日)から、ゲーテの死の翌日(一八三二年三月二十三日)師の遺骸のかたわらに立つて、しばし感慨にふけつたあの感激的な瞬間に至るまで、そこにはつねに變らぬ師に對する弟子の崇敬と、讚歎と、愛情とがあつた。

エッカーマンとゲーテとの出會はまことに宿命的な出會であつた。エッカーマンの生涯にとつては實に運命的な轉機であつたと言わねばならない。時に七十四歳の詩人ゲーテは、いわば過去にのこした幾多のすぐれた作品の重荷のもとに喘いでいた。内的にも外的にも、生涯の清算の時機に直面していたと言うことができる。何よりも秩序を愛し、几帳面なゲーテは、社交や公務にわすらわされて仕事の餘暇の得られぬ悩みを持つていた。ちょうどその頃、ゲーテの決定版全集 (Goethes Werke, Vollständige Ausgabe letzter Hand 40 Bde.) 出版の計畫があり、それに關してしなければならぬ仕事は山ほどあつた。ことに當時のゲーテの思想、感情とは全く距つてしまつた、ごく初期のものを整理しなければならなかつた。そのために、このような仕事を興味をもつて處理してくれる若い人の手が是非とも必要であつた。ゲーテは絶えず心にかけてこのような人をさがしていたが、なかなか適當な人が得られなかつた。ゲーテが最も有望な助手と考えていたのは、Karl Ernst Schubarth という若い學徒で、一八一八年に „Zur Beurteilung Goethes“ という書物を出していた男である。教養もあり頭もよく、この仕事には最も適當な人物と考えられたが、生活の保障やなにかを考えると、彼をわざわざワイマルへ呼び寄せる決心がゲーテにはつきかねていた。ちようどそこへ飄然と姿をあらわしたのが、遍歴文學徒弟とでもいふべき三十一歳のエッカーマンであつた。そこで、シューバルトの役は彼に振り當てられることになつた。彼は教養の點ではもとよりシューバルトにかなわなかつたが、持前の勤勉と忍耐力とで、あらゆる障害を排除したのである。たとえ學識の點では劣つていても、ゲーテに對する深い心からなる傾倒の點では、彼は何人にもおくれをとらなかつた。このシューバルトについては C. G. Carus がその印象を „Er hat viel Geist,

aber, fast möchte ich glauben, sehr wenig Liebe.“と述べているが、エッカーマンは實に Houben が言うように、バイブルの „Die Liebe höret nimmer auf.“ という言葉がそっくりあてはまるような男であつた。

エッカーマンの半生は「對話」の緒論のなかで彼自身が語つてゐるように、まことに痛ましい苦闘の連続であつた。彼は北ドイツの Hannover 州の Winsen という一寒村に貧しい行商人の子として生れた。彼が牛飼や、畠仕事をして幼年時代をすごした家庭は、藝術とか教養とかいうものからは、およそ縁遠い世界であつた。しかし、あるとき父が町から買つて歸つたタバコの袋に描かれてあつた馬の繪によつて、彼の藝術的開眼はなされた、と彼は語つてゐる。やがて、ある人の好意で語學や音樂の教育をうけるようになり、後には司法書記をした、自由獨立戰爭に志願したりなどしたあげくに、とにかく大學に學び、ついには文學で世に立つと決意するに至つた。そして詩をかき、ゲーテに没頭したあげく一八二二年、ゲーテへの崇敬を基とした論文 „Beiträge zur Poesie mit besonderer Hinweisung auf Goethe“ を書き、これをゲーテのもとに送つて（一八二三年五月）出版の世話を乞うたのが、そもそもゲーテとの交渉の動機であつた。彼はこの論文を「特に若い人たちの創作に對してばかりでなく、文學作品の理解に對しても寄與しようと望んで」書いたのであつた。

こういうわけで、エッカーマンはワイマルに住みつゝ意志は元々持つてゐなかつた。ゲーテに會つた後は何處かで創作の勉強をしようと考へてゐた。しかしゲーテの魅力は彼をとらえ、ゲーテもまた青年エッカーマンに心を惹かれたのである。そして、ゲーテが彼に對して何くれとなく示した心づかいは、まことに親身も及ばぬものであつた。エッカーマンは、ゲーテに會う以前にもすでに手紙をかき、詩集を送つていたが、詩には大して才能を認めなかつたゲーテも „Beiträge zur Poesie“ を讀んで彼の才能に心を惹かれたらしく、 „So etwas liest man gern. Große Klarheit, Fluß der Gedanken, alles tüchtig durchdacht, schöner Stil.“ という感想を

もらしている。そして、これこそかねて自分が求めていた協力者 (Mitarbeiter) となる資格をそなえた青年だと考えた。ゲーテがこの論文を読んでうれしく思つた點は、ゲーテの思想が豊かに正しくとり入れられているばかりでなく、ゲーテがただ暗示するにとどめたものを更に發展成長させていて、それが全くゲーテの意圖と合致する點であつた。即ちエッカーマンは、ゲーテに對する崇敬の念ばかりでなく、同時に感受性と智性とを合わせ備えたところの、ゲーテのいわゆる理想的な讀者 (der ideale Leser) であつた。またエッカーマン自身の言葉を用ゐるならば生産的な讀者 (der produktive Leser) だつたのである。ゲーテは、はじめてエッカーマンに出會つた翌日の一八二三年六月十一日に C. F. Schultz に宛つた手紙のなかで、彼の第一印象を „ein gar guter, feiner, verständiger Mensch“ と述べてゐる。また翌年の二月四日付の C. G. D. Nees von Esenbeck 宛の手紙では „Seine Neigung zu meinen Arbeiten und die Übereinstimmung mit meinem Wesen überhaupt trägt mir schöne Früchte, indem er mir, zu einer neuen Ausgabe, ältere vorliegende Papiere sichtet.... Eine freie Übersicht und ein glücklicher Takt qualificiren ihn zu dem Geschäft, das ihm zugleich Freude macht.“ と書いてあり、また同年八月二十日には、自然科學上の友人である E. J. D'Alton 宛の手紙のなかで „Eckermann hat sich mit reinem Gemüt und hellem Geist an mein Wesen und Wirken angeschlossen.“ とエッカーマンのことをほめたを述べてゐる。

„Beiträge zur Poesie“ はゲーテの盡力によつて Cotta 書店から出版されることになつた。エッカーマンは非常によろこんだ。ゲーテはそのほか何くれとなく彼に好意を示し、彼が行くつもりだつたイエーナでの便宜をはかつてやり、その他これまでと注意を與え、配慮を惜しまなかつた。彼にはこの好意が身にしみてうれしかつた。ゲーテにしてみれば、この時すでに、エッカーマンをなんとかして自分の協力者として、ワイマルに引き

とめる考えがあつたからである。嚴密に言えば、エッカーマンに會う以前からすでに、おぼろげながらこのような意圖をゲーテは抱いていたらしく、會つてみての好印象にいいよ決心をかためたのである。しかし、エッカーマンは „Beitrag“ のようなものは早く卒業して、何處までも創作に向いたい希望を抱いていたので、ゲーテとしても早速その話を切り出すわけにも行かず、まず色々の仕事の手傳を依頼したりなどして、長く引きとめようとつとめ、ついにエッカーマンをワイマルに住まわせることに成功した。しかし、これはゲーテの功利主義とばかりは言えないであらうし、エッカーマンとても仕方なくゲーテに屈服したわけではない。ゲーテに自然にそなわる偉大な魅力が結局そうさせたのであらうし、結果的に言えば、こうなるのが兩方にとつて幸いだつたかもしれないのである。

*

さて、ゲーテはエッカーマンという得がたい協力者を手に入れたものの、それをいつたいどのように用いたのであらうか。ゲーテはエッカーマンに、主として決定版全集のための原稿や書簡の整理や、その他いろいろの仕事の手傳いをさすと同時に、また自分の相談相手にしようと考えた。しかし、彼によつて自分の談話が記録されるようにならうとは、まだ思つてもみなかつた。エッカーマンも、ゲーテのもとに止まらうという考えを抱くと同時に、直ぐ「對話」の執筆を計畫したわけではない。彼はゲーテのもとにたびたび出入りしているうちに、如何に自分の智識が乏しいかを痛感した。不十分な學校教育しか受けず、ほとんど獨學でやつて來た彼は、ゲーテのような精神的巨人に向うと自分をまるで侏儒のように感じた。そして、ゲーテのもとでどんなに豊富な知識と教訓が得られるかを知つた。そこで彼は、一八二三年から二四年にかけての冬の間にゲーテのもとで見聞したこ

とを書きとめにかかった。はじめは何の意圖もなく、ただ日々の出来事を記録したにすぎない。許嫁の Johanna Bertram に宛てた日記風の手紙や、エッカーマン自身の日記(その断片、一八二四年二月二十五、二十七、二十九日等の日記が遺稿中に発見されている)などに書きしめたのである。しかし、やがてこれらの記録を一冊にまとめてみようという考えを抱くに至つた。しかし、それがはたしてエッカーマン一人の考えによるものか、それともゲーテの勧めによるものかはわからない。一八二四年二月十五日には、それまでに書きとめた談話をゲーテに見せた事實がある。その日のゲーテの日記に、Eckermann brachte die ersten Jahre der Chronik wieder und die aufgeschriebene frühere Unterredung“とある。一八二五年、二六年になると、すでに二人の間で出版に關する相談がなされたことが簡單ながら日記などどうかかわれる。またエッカーマン自身も、一八二五年六月六日の許嫁への手紙で次のように書いてゐる。„Meine Arbeit rückt langsam vor, aber es wird auch etwas sehr Gutes. Goethe, dem ich vor einigen Tagen die ersten Gespräche zeigte, ist sehr erbaud davon und findet die Arbeit vortreflich. Ich werde damit sicher ein großes Glück machen und nicht allein in Deutschland, sondern auch in Frankreich und England dadurch einen guten Namen bekommen.“

さて、出版することは決定されたものの、その時機に關しては、はじめゲーテは明言をさけた。一八二六年の五月になつてエッカーマンがその出版をせまつたとき、はじめてゲーテは「まず決定版全集を出すことが肝心である。次にはシラーとの往復書簡を出したい。對話の出版はその後だ」と答えている。これによつてゲーテの意圖はほぼ明らかとなつた。即ち、「詩と眞實」(一七七五年まで)、「年代記」(一八二二まで)に續くゲーテの最後の生活記録を「對話」のかたちでのごそつたものである。ゲーテは、それまで書き續けてきた「年代記」

を、もはやそれ以上続けることが困難なのを感じて、その先をエッカーマンに書かせようと考えた。こうして彼は、ゲーテが筆を擱いたところから先を書き続けることになった。ゲーテはこれによつて、創作により多くの力を注ぐことが出来たが、一方エッカーマンは、このために自己の文學活動を完全に断念せざるを得なくなつた。

一八三〇年十月十二日にエッカーマンが再び「對話」の出版の話を持ち出したとき、ゲーテは最後の断を下した。„keine Veröffentlichung vor meinem Tode!“ しかしゲーテは自分も今後は「對話」に目を通して出来るだけ完全なものにしようと約束した。

エッカーマンがどういう意圖のもとに「對話」を書いたかは、第一部の序を読めばほぼ理解することが出来る。彼は大體つぎのように書いている。「それは價值ありと思われ、注目に値すると考えられた経験を、文章に書いて理解しようとする、私固有の自然的衝動から生れた。私は絶えず彼から教えを得る必要があつた。そこで好んで彼の言葉の要點を書きとめたが、それは將來のために保存しようと思つたからである。また私は、この對話が人生や藝術や學術につき、多くの説明と多くの貴重な教訓を含んでいるばかりでなく、さらにこのような現實生活についてなされた直接のスケッチが、すでに人々が彼の様々の作品から想像している彼の面影を完成するのに、特に寄與するであろうと考えたからである。」はじめはこのような極めてつましい意圖を抱いていた彼も、仕事をすすめて行くうちに次第に自信をもちまた自惚もまして來て、自分の目ざすところはドイツの文化の現在の狀態に有益な影響を及ぼすことにある、と言うようになつた。

ところで「對話」の執筆にあたつて、何か手本となつたものがあるかといふと、先ず考えられるのは當時すでに書かれていた Falk の „Unterhaltungen“ である。しかも、エッカーマンとファルクとは親しかつたから、エッカーマンがこれを讀まなかつた筈はない。また Las Cases の „Mémorial de Sainte-Hélène“ をゲ

ーテが一八二三年に讀んだ事實があり、また Thomas Medwin の „Journal of the Conversation of Lord Byron“ は一八二四年以來たびたびゲーテ家の談話の對象となつてゐる事實からして、エッカーマンがこれらの書物からなんらかのヒントを得たことは容易に想像される。

こうして第一部、第二部の出版されたのは一八三六年になつてからであつた。エッカーマンが出版を急いだ理由のひとつは、當時のドイツ文學界の情勢から、「對話」の出版は早いほど有利だと考えたからである。が事實はそうではなかつた。讀者は青年ドイツ派の論争に氣をとられて、「對話」の如きものにはあまり注意を向けなかつた。しかし、一部のものは大いによろこんでこれを迎えてくれた。不愉快な現在の騒ぎをよそに、美しい過去の世界にひたりたいと考える人たちもいないわけではなかつた。

*

「對話」に對しては、その出版當初から様々の批評がなされた。それは必ずしも諍辭ばかりではなく、個人的感情をまじえた痛烈な非難も少なからずあつた。いま、それらの主なものゝを雜然と拾つてみよう。

Varnhagen von Ense は一八三六年六月十八日付のエッカーマンへの手紙で「對話」の出現を „ein ordentliches Ereignis“ と對し „Es ist ein Lebensbuch, weil es aus dem Leben kommt und ins Leben geht: Goethes Macht und Aussehen tut sich darin auf das Herrlichste dar.“ とたたきつゝる。

Riemer せ „Mitteilungen“ の Vorwort のなかで „Dr. Eckermanns Gespräche dürfen, wenn auch mit einiger Kunst geordnet, … doch in Sinn und Ausdruck vollkommen wahr und zuverlässig, für authentisch gelten.“ と評してゐる。

Franz Grillparzer はまた次のようなすこぶる穩當な意見をはらうる。「エッカーマンの書物はゲーテの本質を知るうえに、この上もない價值をもつてゐる。しかし、個々の言説を、それが何時また誰に向つて語られたかを考えずに、全體のつながりから切りはなして受取することは用心しなければならぬ。」

Heinrich Laube は、Ich fand den alten Herrn darin gerade so, wie ich mir ihn immer vorgestellt, so gesund und weise; die Lektüre für mich ein wahres Entzücken gewesen.“ と述べてゐる。

Heinrich Heine はエッカーマンのことを Goethepapei などと呼んでゐるが、一八五一年、病床に於て「對話」の一、二部を繰返して讀んで、wahrhaft pomadiges besäftigendes Vergnügen“を見出し、ある友人にその閱讀をすすめてゐる。

また近代に於ては Friedrich Nietzsche は、Menschliches, Allzumenschliches. II. 2. Abt. 109 “ に於て、Wenn man von Goethes Schriften absieht und namentlich von Goethes Unterhaltungen mit Eckermann, dem besten deutschen Buche, das es gibt: was bleibt eigentlich von der deutschen Prosa-Literatur übrig, das es verdiente, wieder und wieder gelesen zu werden?“ と言つてゐることは周知の事實である。しかし、「對話」に對してはまた可なり痛烈な非難攻撃も行われたのであつた。

たゞさう Ludwig Börne は、Götzendienst “ たゞの諧謔をトッ、Nikolaus Lenau は、Eckermann und Goethe, Bläseruhr und Flöte “ と面白く讀を踏ませてゐる。

また Friedrich Hebbel は「對話」をほとんど無批判的なゲーテ心酔の書だと非難し、同時にその經歷が少なからず自分のそれに似てゐるエッカーマンが、ゲーテという大樹の蔭に心地よげに憩う様や、師のゲーテからそつくり受けついだと思われるエッカーマンの明朗さを羨んだ。また一八三七年九月十三日付の Elise Lensing

宛の手紙のなかには „Er kommt mir vor, wie Adam, dem Gott der Herr seinen Hauch einbläst.“ と
揶揄しているのである。

*

第一部、第二部の好評に氣をよくしたエッカーマンは第三部の計畫を立てた。これは彼の手許にある多くの資料とすぐれた記憶力に基づいて、先の二巻の補遺の形で出版されたものである。一八三七年七月二十七日に Brockhaus 書店に對してこの計畫を話し、賛成を得ている。しかし、ゲーテの遺稿の仕事に忙殺されたエッカーマンは早速仕事に取りかかることが出來ず、書店から催促をうけたほどである。また手持の材料だけでは十分でないので、それを補うために Friedrich Soret の手記を利用する許しを得た。ソレーはジュネーヴの人で、一八二二年ワイマルの大公殿下の教育監督として招かれていたが、ことに自然科學上の知識があつたために、ゲーテとも長く親交のあつた人である。そして、ゲーテとの親しい接觸を日記に書きとめていた。第三部の四分の一はソレーの手記によるもので、エッカーマンはそれに*印を付けて自分のと區別している。

エッカーマンは第三部の序文で「この長い間約束していて、やつと出來上つた私のゲーテとの對話を目の前に見ると、大きな障害にうちかつたというよろこびを禁じえない。私の立場は非常に困難であつた。……最初の二巻を書き上げたときは、……聞いたばかりの言葉がまだ耳許にひびいていた。……そのために翼に乗つて目的地へ運ばれるような氣がした。しかし、あの聲もすでに長年この方消えうせ、親しく相見るあのよろこびもはるかに遠ざかつた今では、沈思默考して過去をまざまざと想ひうかべることの出來る時にのみ過去がよみがえりはじめ、彼の偉大な思想と偉大な面影とが……目のあたりに浮かんた時にのみ、必要なあの感激を得ることが出來

た」と書いている。

このような困難と戦いつつエッカーマンは第三部を書き上げたが、出版に關してブロックハウス書店との間にいざこざが生じ、結局一八四八年に *Heinrichshofensche Buchhandlung Magdeburg* から出版された。しかしこれも一八六八年になつて、再びブロックハウス書店から第三版として出る事になつた。

ここで、なお計畫のみに終つた第四部のことを簡単に述べておこう。第四部の計畫はすでに一八四八年に立てられていたらしい。一八五年の手紙によると、第四部では「ファウスト第二部」の成立をめぐるゲーテとの間の會話を主に取扱うつもりだつたらしい。一、二、三部と合わせて、まとまつた本にして、同じ出版社から出す計畫であつたが、話合いがつかかなかつた。仕事が順調にはこへは、一八五四年の春には出版できる豫定だつた。ところが、一八五四年の一月にエッカーマンは病氣にかかり、一旦よくなつて仕事を始めたが夏以來また容態は悪くなり、ついに十二月三日に不歸の客となつた。そのため、第四部はわずか斷片の形でこのつてゐるにすぎない。エッカーマンの死はまことにおしい。ことに「ファウスト第二部」の成立について、色々と問題の解明に資したであらうことを考えると、かえすがえすもおしまれる。

*

次に「對話」がどの程度まで眞實を傳えているかという問題を考えてみよう。これを裏書するものは先ずフォン・ミュラー翰長の言葉である。彼は一八三六年三月二十九日、「對話」の出版以前に原稿と作者の朗讀とでその内容を知つたとき、次のような意見を述べてゐる。„Herr Dr. Eckermann hatte als mehrjähriger treuer Tisch- und Arbeitsgenosse Goethes nicht nur die beste Gelegenheit zu den Aufzeichnungen seiner Ge-

sprache, sondern die kindliche Unbefangenheit, die klare Auffassungsgabe, mit welcher er den Reichtum der Goetheschen Mittheilungen in sich aufnahm — in ein reines durch System- und Parteisucht noch völlig ungetrübtes Gemüth — bürgen uns auch dafür, daß das mit möglichster Treue alsobald Niedergeschriebene unvermischt geblieben mit fremdartigen Zusätzen und Vorstellungsweisen. Hatte doch seine Pietät für Goethe ihm am wenigsten jemals erlaubt, anmaßlich zu deuten und zu klingen, wo es ihm gerade als höchstes Verdienst erschien, Sinn und Worte des verehrten Meisters in voller Lauterkeit und Unschuld wiederzugeben!“ ゲーテを知りぬき、自分でもゲーテとの談話を著わしているシニエー翰長の言には一應信を置くべきものであらう。

「對話」の眞疑を検討する材料となるものは、先ずゲーテの日記と手紙であり、エッカーマン自身の日記及びその他の人々の記録である。しかし、ゲーテ自身の日記にも間違いが無いわけではない。ことに晩年には口述筆記をさせるならわしであつたし、それがその日のうちに清書されたわけでもなく、いちいちゲーテがそれに目を通したとも考えられず、誤りの生じる可能性は多分にある。事實 *Houben* などの研究によると、ゲーテの日記とエッカーマンの日記とは、記載の事實に可なり相違があるらしく、「對話」に關する限りでは、エッカーマンの日記の方が記事も豊富である。エッカーマンの日記では「對話」に用いた記事だけが鉛筆で消され、使われなかつた、とくに私事に關する記事はそのまゝのこされているという。この點ではエッカーマンの日記の方がゲーテの日記以上に「對話」研究の貴重な資料となるわけである。

この問題に關しては *Petersen* が、*Die Entstehung der Eckermannschen Gespräche und ihre Glaubwürdigkeit* に於て克明な研究を行つてゐる。彼によると「對話」のなかで日付及び内容の點で全く信頼しうるも

のはわずかに三分の一程度だといふ。そして彼は「對話」を次の六つの層 (Schichten) に分類している。

- (一) Tagebuchaufzeichnungen in Rohform. あらゆる點で信頼しうるもの。
- (二) Wörtliche Aussprüche ohne Umgebung. その言葉だけは信頼しうるもの。
- (三) Ausarbeitungen ursprünglicher Tagebuchaufzeichnungen. 時日は信頼出来ても内容は多少疑わしい。

②。

- (四) Zusammengesetzte, zerlegte und verlegte Gespräche. 内容は信頼出来ても時日は疑わしいもの。
- (五) Benutzung fremder Materialien. そのままは信じられぬもの。
- (六) Erfundene Gespräche. あらゆる點で信頼出来かねるもの。

そしてペーターゼンは一つ一つの記事について嚴密な検討を加えている。

故にエッカーマンの書きしるしているゲーテの言葉が、以上の何れの層に屬するかをよく吟味した上でなければ、直ちに信頼は出来ない。二人の對話がいかにも均衡を保ち、みことなままりを見せているような場合はその信頼性はうすい。ゲーテもエッカーマンも、共に言葉すくなく語る時は眞實で、長々と喋るときは一應あやしうと言うことになる。しかし、本當にゲーテが口にした權威ある言葉よりも、むしろエッカーマンがゲーテに代つて語つた眞實ならぬ言葉の方に、反つて生命力と説得力があるかもしれない。

ペーターゼンもまた次のように説いている。先の六つの層が順を追うて biographische Tatsächlichkeit からの後退を意味するとすれば、それはまた同じ順序に従つて Materie から Geist く、Stoff から Gestalt く、Chronik から Mythos く、passive Registratur から schöpferische Anschauung く、zerstreute Vielheit から lebensvolle Einheit く、zufällige Wirklichkeit から künstlerische Wahrheit への前進を意味する。

してみると、正しい記録が必ずしも高い価値をもつわけではなく、眞實ならぬ記録も直ちに無価値であるとは言えない。たとえ間違つた事實や疑わしい記述がどれほど多くても、エッカーマンの「對話」の価値を全面的に否定することは許されない。それらの疑わしい箇所も、ゲーテ自身の證言によつて見事に確められるし、他の信頼すべき箇所によつて十分につぐなわれるからである。

*

はじめてエッカーマンの「對話」を讀むと、そのすばらしさに惹きつけられるが、幾度も讀みかえすうちにその魅力はうすれ次第に缺點も目について来る。ペーターゼンのようなこまかい詮索をまつまでもなく、第一部、第二部と第三部との間の相違に氣づくことが出来る。第一部、第二部には、たしかにまだゲーテ自身の對話という感じがあるが、第三部になるとエッカーマン的色彩がきわめて濃厚となり、エッカーマンが勝手氣儘にふるまつてゐるという感がふかい。さらにまた「對話」があまりにも整ひすぎ、ゲーテを美化しすぎていることなどにも氣付くのである。

エッカーマンは、いつたどういう態度で「對話」を書きとめたのであろうか。彼は普通考えられているような單なる速記者ではない。ゲーテの話をその場で、機械のように一字一句のこらず記録したのではない。ゲーテのもとから歸宅するや直ちに机に向つて、聞いて來た話を書きとめることも、必ずしも出来なかつたであろう。時に筆の澁滞することもあつたであらうし、用事にさまたげられて、心ならずも幾日も筆をとらずにすごすこともあつたであらう。彼は、一行も書かずに半年もすぎたこともある、と告白しているほどである。彼はゲーテから聞いた話を、日をへてのち自分の考えに従つて適當に取捨選擇しながら、書きとめた。それ故ゲーテの言葉

が、正確にその語られた日に記載されているかどうかは疑わしい。ゲーテは同じ事、似たような事を幾度語つたかしかない。しばしば話題となつてゐる「色彩論」や「ファウスト第二部」などは恐らく百回以上も語られたであらう。故に、それはエッカーマンの血肉となり、記憶の母體となつてゐる。ゲーテの考え方、表現法がすつかり身についてしまつて、いわば第二の天性とさえなつてゐる。そのように繰返して聞いた上で十分に成熟させたものを渾然たる姿で書きとめたのであつて、決してきれぎれの記録の集積ではない。彼は編年史的傳記を目論んだのではない。彼の態度は、ちょうど歴史小説作家が必ずしも杓子定規に史實に忠實に書かぬのと同じである。人はゲーテが「詩と眞實」を書いたときの態度を考えてみればよい。「對話」は單なる事實の記録ではなく、崇敬する師の本質的な理解に基づいて、純化された眞實を傳えるところの一つの藝術的作品なのである。

エッカーマンは實に再現の天才 (Genie der Reproduktion) であつたということが出来る。そのことは第三部にある一八二八年三月十一日の記事が何よりも證明してゐる。エッカーマンの日記にはただ „Abends bei Goethe, interessantes Gespräch, Produktivität, Genie, Napoleon, Preußen.“ としか書かれてゐない。これが十數年の間に心の中で立派に成熟して、思想的にも文體的にも發展をとげて、あのような十數頁にもわたる見事な對話となつたのである。エッカーマンはこれに關して、「むろん容易なわざではなかつた。この一日の對話を書くために、まる四週間をついやした」とほこらしげに告白してゐる。これは實に、われわれにエッカーマンの藝術工房を示してくれる。このつつましいゲーテの聞き手は、たんに歴史家であつたばかりでなく、また形成的藝術家でもあつた。たんにすぐれた記憶力によつて、ゲーテのきれぎれの言葉を傳えようとしたのではなく、ゲーテの精神的態度、およびゲーテをとりまく全體的雰圍氣を描こうとした。彼がゲーテから受けとつた印象を廣く人々に傳達し、その影響を永く後世にとどめようという目的で仕事をしたのである。

「對話」のすばらしさはいつたい何處から來るのであろうか。内容の豊富さと形式の見事さは何から來るのであろうか。それは先にも述べたように、同一の問題を幾度となく語りあい、長年かかつて考えぬき研究しつくしたあげく、それを見事にまとめた編集のうまさと表現の巧みさから來るのである。しかし、それには並々ならぬ才能が必要であつた。ファルクにも、リーマーにも、ミューラーにもそれは缺けていた。エッカーマンはニュアンズに富んだ様々の氣分を、すばやく感じとるするどい感覺をもつていた。様々のシチュエーションを見ぬく目をそなえていた。同時にまた、日記の祕密と手紙の告白とを「對話」のなかで巧みに結合する術をも心得ていた。最も手近なものを、再び藝術的彼方へ押しやる術も心得ていた。このような技術と、瞬間のデリケートな魅力と言葉に把握する才能とを彼はあわせそなえていた。彼は實に言葉の名手であつた。このような敘述の骨を彼は外ならぬゲーテから學んだのである。

たとえば、ゲーテの肖像畫の数はすこぶる多くて、その何れがゲーテの眞の姿なのかわからぬほどである。ただ斷言できるのは、その何れの一つもゲーテそのものではあるまいということだ。およそ寫眞とか肖像畫とかいうものは一瞬の靜止せる姿をうつし取つたもので、映畫のそれには及ばぬものだが、對話はたとえていえば映畫に於けるように、その折々の姿を様々にうつしたのと言うことも出来るであらう。また對話の魅力は、つね日頃、たとえば作品を通して間接にしか知りえない偉人と、直接相對坐して語りうる親しさにある。直接私生活のなかにとびこんで、普段着の姿に接しうる點にある。讀者に對して、これこそ最もプライベートな體驗だ、という印象を與える點にある。エッカーマンの「對話」が長くその生命を保つ理由の一つはここにあるのであらう。またエッカーマンはゲーテをあまりにも美化しすぎている。あまりにも調和のとれた、理想的な姿に描きすぎている感じがする。ゲーテとても不機嫌にだまりこくつたり、氣むずかしく腹を立てた場合もあつたであらう。

のに、「對話」に於ては、ゲーテは何時も「ことのほか上機嫌」で、「すこぶる愉快に」語つてゐる。この點では、ゲーテの言葉をなんの修飾も加えずに、生のままに書きしるしたミューラー翰長の對話の方に、かえつてゲーテの怒りの氣分や、皮肉の調子がじかに出てゐるように思われる。しかし人は誰でも、自分の姿を美しくうつしてくれる鏡を好むものであるが、いわばエッカーマンはゲーテを最も調和ある、美しい姿にうつし出す鏡であつた。ゲーテとてもとより悪い氣持はしなかつた。そして、エッカーマンが讀者に大變うけた理由の一つはここにあるかもしれない。何故ならば、讀者が偉人に對して求めるものはその眞實の姿ではなく、むしろ美化された姿である場合が多いからである。つまり讀者の欲するものは眞實ではなくて、小説であり、神話であるからだ。

さてエッカーマンの「對話」は、嚴密なゲーテ研究のための書としては可なり缺點に富むものであるが、その資料としての價值が減少するだけ、かえつて個性的な、獨自な作品としての藝術的價值は高まるわけである。まさしく、表題の示すようにエッカーマンの「ゲーテとの對話」であつて、よく言われるようにゲーテの書ではない。「これこそ私のゲーテだ」と主張する權利をエッカーマンは持つてゐる。あるいは、エッカーマンの書いたゲーテ小説ということが出来るかもしれない。ゲーテ自身その對象となり、素材となりながら、その成立を樂しげに見やり、時には様々の忠言を與えつつ出来上つた小説である。彼はそのなかで、ウィルヘルム・マイスターよりもさらに生氣ある、ファウストにも比すべき姿に描かれてゐる。そして、これがゲーテの死後に發表されたという事情は、「對話」を一種の福音書としてゐる。ゲーテは「對話」が生前に發表されることを賢明に引きのばすことによつて、後世に自分の姿を信じてませうとしたとも考えられる。

最後にエッカーマンの身分の問題にふれてみたい。エッカーマンは從來そう思われているように、ゲーテの秘書 (Sekretär) ではなかつた。彼は後年この誤解に對してしばしば抗議を行つてゐる。

一八三八年、ブロックハウス書店が、百科辭典のゲーテの項目に付録としてそえるために、エッカーマン自身の簡單な傳記を求めたとき、彼はこの取扱ひ方に不滿を抱き、十二月二十七日付の手紙で次のように答えてゐる。「世人は私がゲーテの秘書であるように噂し、また公言しているが、それは正しくない。それは事情に通じない、私とゲーテとの本當の關係を知らぬ者の言である。私のゲーテに對する關係は弟子 (Schüler) として、協力者 (Mitarbeiter) として以外の何者でもない。そして、この關係は私にとつて隨分費用のかかるものだ。というのも私はずつと自費で生活して來て、時々ゲーテと食事を共にしたり、會合の仲間入りをしたりするのが楽しみといえはいるくらいのものだ。尤もその際得られる精神的な利益は大きかつたけれども。」また一八四四年三月五日付のラウペン宛の手紙に於ても同様の意見をのべてゐる。特にこの手紙は彼がゲーテのもゝとで果した役割を十二分に物語つてゐるので繁をいとわず原文を引用することにする。

„Ich sehe, daß man mich in Ihrem Kreise (dem des ‚Jungen Deutschlands‘) als Goethes Sekretär bezeichnet hat. Hieran ist kein wahres Wort. Es ist so wenig Goethen als mir je eingefallen, sein Sekretär zu sein. Ich war ebensovienig Goethes Sekretär als Shelley der Sekretär von Lord Byron war. So lange ich in Weimar lebte und in das Goethesche Haus Zutritt hatte, hieß Goethes Sekretär John. Es war dies ein schön schreibender, junger Mann, dem Goethe diktierte und der das durch Riemers Hilfe korrigierte Manuskript ins Reine schrieb. Mein Verhältnis zu Goethe war eigentümlicher Art und sehr zarter Natur. Es war das des Schülers zum Meister, das des Sohnes zum Vater, das des

Bildungs-Bedürftigen zum Bildungs-Reichen. Ich sah ihn oft nur alle acht Tage, wo ich ihn in den Abendstunden besuchte, oft auch jeden Tag, wo ich mittags mit ihm, bald in größerer Gesellschaft, bald tête-à-tête zu Tisch zu sein das Glück hatte. Doch fehlte es unserem Verhältnis auch nicht an einem praktischen Mittelpunkt. Ich nahm mich der Redaktion seiner älteren Papiere an, ich assistierte ihm bei der im Jahre 1826 begonnenen Herausgabe seiner Werke in vierzig Bänden; auch nahm ich teil an „Kunst und Altertum“, wozu ich ihm einige Beiträge gab. Er dankte mir seinerseits dadurch, daß er mich in seine Kreise zog und an den geistigen und leiblichen Genüssen eines höheren Daseins teilnehmen ließ.“

それ故、彼が「對話」のなかに於ても、ゲーテに對する彼の關係が獨立した自由な一人の協力者であり、若き一人の友人であると主張しようとする努力がみられるのは當然である。時にはそれが幾分露骨に示されることがある。ゲーテと彼とを最も密接に結びつけているところのもの、即ちゲーテの仕事の手傳いについては、ごくわずかしが記述していないが、これは恐らくゲーテ家に於ける彼の地位が不當に低く見られない爲の心ずかいからであらう。作品に關してエッカーマンが詳しく語っているのは、たとえば「ノヴェル」や「詩と眞實」の完成の場合のように、ただ彼がゲーテの激勵者、忠言者であるときか、「俳優規則」„Regeln für Schauspieler“やゲーテの手紙の出版計畫についての場合のように、その整理が彼に一任されたような場合に限りられている。これらの例はすべてエッカーマンがゲーテの書記とみなされないで、友人と考えられることをどんなに望んだかを示している。事實ワイマルの新墓地の彼の墓標には、„Hier ruhet Eckermann, Gothes Freund“ とかかれている。

實さい彼は「對話」を書いたばかりでなく、ゲーテの創作活動に對しても直接影響するところが多かつた。彼の任務はたんに原稿の整理、資料の蒐集に止らず、忠言者であり、激勵者でもあつた。彼なしには斷片に終つたかもしれないものが、彼のおかげで數々完成している。たとえば「ファウスト第二部」、「詩と眞實」などがそれである。ゲーテ自身もその事を認めて、ミュラー翰長の「Unterhaltungen」の一八三〇年六月八日の項に於て「わたしはファウストを書き續け、第二部の最初の二幕がほとんど完成したのは、主としてエッカーマンの御蔭である」と述べている。

結果論的に言へば、エッカーマンの名が後世に傳つたのは、ひとえに「對話」によつてであり、恐らく彼の詩作によつても、評論によつても名聲を得ることは困難であつたろう。ゲーテは創作で立とうという彼の夢を無慙にも踏みにしつてしまつた。この行爲はまことに冷酷ともみえ、エゴイステイクとも考えられる。しかしこの方が結果から言へばエッカーマンにとつて幸福だつたであらう。文學の大道に出れば彼はやがて落伍したかもしれないのである。しかしながら、エッカーマンを目して全く無批判、無抵抗な機械の如き存在と考え、ただ唯々諸々とゲーテの言葉を記録した職業的書記にすぎぬとする考え方は不當である。従つて「對話」をエッカーマンの書でなくて、ゲーテ自身の書であると見なす考えも正しくない。ゲーテをしてあのように見事に語らしめたのは全くエッカーマンの手腕によるのであり、彼の身にそなわつた人格の賜物なのである。俗に話し上手に聞き上手という言葉があるが、ゲーテは、エッカーマンという無類の聞き上手に恵まれたおかげで、あのような形で晩年の姿を後世に傳えることができた。その功績は當然エッカーマンに歸せらるべきものであらう。恐らくゲーテとエッカーマンの優劣論を大まじめにやる人はなかりうと思うが、よくエッカーマンを愚直の標本のように言い、彼からゲーテを取り去つたならば、いつたい後に何がのこるかという論をなす人があるが、これは無意識

のうちにこの優劣論を行つてゐるにも等しいもので、こう言う人自身はゲーテに近い存在と自負してゐるのかもしれないが、案外このような人はエッカーマンの足許ぐもよれない人間なのかもしれない。

(一九五四・十一・二五)

エッカーマン著作目録

Gedichte. Auf Subskription gedruckt. 1821.

Beyträge zur Poesie mit besonderer Hinweisung auf Goethe. Stuttgart 1824.

Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens, Bd. 1-2. Leipzig 1836. Bd. 3. Magdeburg 1848.

Gedichte. Leipzig 1838.

Zahlreiche Aufsätze in „Kunst und Altertum“ und im „Morgenblatt“.

Goethes Faust am Hofe des Kaisers. In 3 Akten für die Bühne eingerichtet. Aus Eckermanns Nachlaß hrsg. von Friedrich Tewes. Berlin 1901.

Aus Goethes Lebenskreise. J. P. Eckermanns Nachlaß. Hrsg. von Friedrich Tewes. 1. Band, Berlin 1905.

参考文献

J. P. Eckermann: Gespräche mit Goethe. Neu hrsg. v. H. H. Houben. 1949.

〃 : Beiträge zur Poesie mit besonderer Hinweisung auf Goethe. Hrsg. v. Karl Georg Wendrin. 1911.

Goethes Gespräche. Neu hrsg. v. Frhr. v. Biedermann 5 Bde. 1909.

F. W. Riemer: Mitteilungen über Goethe. Hrsg. v. Pollmer. 1921.

Goethes Unterhaltungen mit dem Kanzler Friedrich Müller. Hrsg. v. Albrecht Knaus. 1948.

Julius Petersen : Die Entstehung der Eckermanschen Gespräche und ihre Glaubwürdigkeit. 1925.

H. H. Houben : J. P. Eckermann. Sein Leben für Goethe. 1925.

„ : Goethes Eckermann. Die Lebensgeschichte eines bescheidenen Menschen. 1934.

R. M. Meyer ; Gestalten und Probleme. 1905.

Ernst Beutler : Essays um Goethe II. 1947.

Josef Hofmiller : Wege zu Goethe. 1949.